

急性中耳炎の原因菌

—ペニシリン低感受性肺炎球菌と反復性中耳炎の関係—

杉 田 麟 也

千葉市

出 口 浩 一

東京総合臨床検査センター研究部

藤 卷 豊

市川市

浅 井 俊 治

東京都

渡 辺 洋

武谷病院

清 水 浩 二

東京都

小 松 信 行

浦安市

岡 野 和 洋

浦安市

阿久津 勉

浦安市

斎 藤 成 明

東京都

CAUSATIVE BACTERIA FOR ACUTE PURULENT OTITIS MEDIA : RELATIONSHIP BETWEEN PENICILL INSENSITIVE STREPTOCOCCUS PNEUMONIAE (PISP) AND RECURRENT OTITIS MEDIA

Rinya Sugita, Chiba, Koichi Deguchi, Tokyo Clinical Research Center

Yutaka Fujimaki, Icikawa, Shinji Asai, Tokyo, Hiroshi Watanabe, Tokyo,

Koji Shimizu, Tokyo, Nobuyuki Komatsu, Urayasu, Kazuhiro Okano, Urayasu

Tsutomu Akutsu, Urayasu, Shigeaki Saito, Tokyo

The causative organisms of acute purulent otitis media in children visiting eight private ENT clinics were investigated. Results were as follows :

1. *S.pneumoniae* and *H.influenzae* were predominant among the isolates.
2. There was a change in the antibiotic susceptibility of *S.pneumoniae*. Penicillin G insensitive *S.pneumoniae* were detected 24% of the over all number of *S.pneu-*

moniae strains and 11% of the overall number of patients investigated.

3. Middle ear discharge was readily controlled by oral penicillin in patients with PISP, but otitis media was apt to recur often the withdrawal of penicill.
4. PISP localized in the nasopharynx was apt to resist treatment.
5. PISP is often detected in children under four year of age.

はじめに

小児急性化膿性中耳炎の主な原因菌は、*Streptococcus pneumoniae* (*S.pneumoniae*) と *Haemophilus influenzae* (*H.influenzae*) である¹⁾。その治療は ampicillin (ABPC) が第1選択薬剤²⁾と考えられ、実際に満足すべき臨床効果をえてきた。ところがきわめて近年である1989年頃からペニシリン低感受性肺炎球菌 (Penicillin G insensitive *Streptococcus pneumoniae* : PISP) が臨床的に注目されるようになってきた。

PISP とは *S.pneumoniae* の PCG に対する MIC が 0.1~1.0 μg/ml を、Penicillin G resistant *S.pneumoniae* (PRSP) は 2 μg/ml 以上の株を意味する。

耳鼻咽喉科医からの PISP の報告は、杉田ら (1990) が小児難治性反復性中耳炎としての症例報告³⁾を、また第22回日耳鼻感染症研究会 (1992) のシンポジウムで杉田は市中診療所で経験した急性中耳炎症例の11%, *S.pneumoniae* の24%から PISP が検出されており⁴⁾、短期間での急増と治療上注意が必要であることを報告した。

小児科、内科にて PISP の分離頻度などの報告がしばしばおこなわれているが臨床的な意味の検討は不十分である。

本稿は PISP が小児急性中耳炎の臨床にどのような意味を有するのかを検討したので報告する。

研究方法

都内、千葉市、浦安市、市川市の合計 8 軒の耳鼻咽喉科診療所を受診した、12歳未満の新鮮な小児急性中耳炎患者を対象とした。初診時に中耳炎分泌物、上咽頭粘液を採取し細菌を検索することとし、以後は上咽頭の細菌の消長を経日的に検査することとした。中耳炎分泌物からの検出菌は β-ラクタマーゼ産生性と薬剤感受性の測定を、上咽頭からの検出菌は β-ラクタマーゼ産生性を検討した。

なお、中耳炎分泌物は鼓膜非穿孔例でも穿刺または切開により、穿孔例では外耳道を十分に消毒した後の中耳炎分泌物を対象とした。

採取した検体の中耳炎分泌物は TCS ポーター (クリニカルサプライ)、上咽頭ぬぐい液はシードスワブ 2 号 (栄研) を用いて、その日のうちに速達便にて東京総合臨床検査センター研究部に送付した。

常法に従い、分離・同定された検出株の β-ラクタマーゼ産生性は acidimetry disc method (β-チエック、ファイザー製薬) により、薬剤感受性は日本化学療法学会最小発育阻止濃度 (MIC) 測定標準法に従い、MIC を測定した。なお、MIC の測定は中耳炎分泌物からの検出株を対象としたが、*S.pneumoniae* については上咽頭からの検出株も加えた。さらに *S.pneumoniae* については、oxacillin disc (MPIPC, Difco) と cephalexin disc (CEX, 昭和) を用いて、benzyl penicillin (PCG) insensitive *S.pneumoniae* (PISP) の有無を確認した。

治療は Sultamicillin 20mg/kg/day を分3で内服させた。

結果

検出菌とその検出率は Fig. 1 のごとくで、主な検出菌は *S.pneumoniae*, *H.influenzae* であり 2 菌種で 57.4% を占めた。ついで *Streptococcus pyogenes* (*S.pyogenes*), *Staphylococcus aureus* (*S.aureus*), *Moraxella catarrhalis* (*M.catarrhalis*) などである。

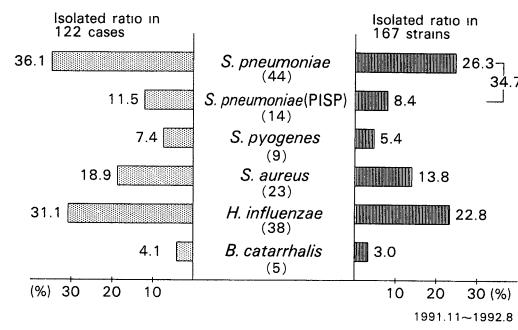


Fig. 1 Isolated Pathogens from middle ear discharge

S.pneumoniae の各種抗生素に対する MIC は Fig. 2 のごとくである。ABPC に対し

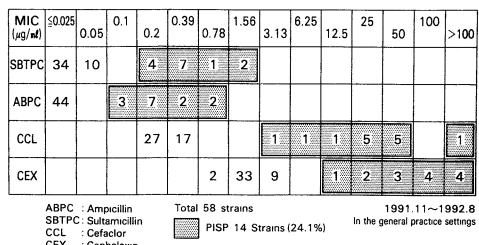


Fig. 2 MIC of *S.pneumoniae*.

て MIC $\leq 0.025 \mu\text{g}/\text{ml}$ は 75.9% の株であり、残り 24.1% は MIC 0.1~0.78 $\mu\text{g}/\text{ml}$ の感受性であった。この 24.1% の株は前述の PISP である。第 1 世代経口セフェムの cephalexin は MIC 0.78~3.13 $\mu\text{g}/\text{ml}$ と、12.5~100 $\mu\text{g}/\text{ml}$ 、第 2 世代経口セフェムの cefaclor は 0.2~0.39 $\mu\text{g}/\text{ml}$ と 3.13~50 および >100 $\mu\text{g}/\text{ml}$ の MIC であった。

中耳炎分泌物と上咽頭ぬぐい液から検出した細菌のうち、 β -ラクタマーゼ産生菌は Fig. 3 のごとくである。中耳炎分泌物から検出し

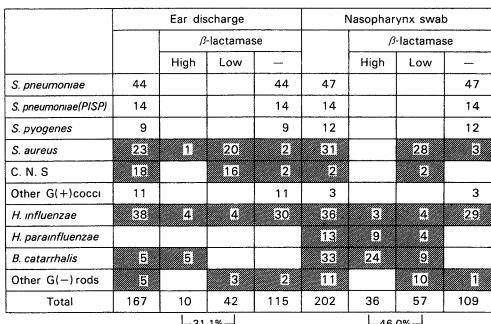


Fig. 3 Isolated organisms from middle ear and nasopharynx, and β -lactamase producing strains

た細菌では 167 株中 7 菌種 52 株 (31%) が、上咽頭ぬぐい液は 202 株中 10 菌種 93 株 (46%) であった。penicillin sensitive *S.pneumoniae* (PSSP) および PISP のいずれも β -ラクタマーゼを産生していない。

SBTPC を 7 日間投与した症例について、治

療前、3 日目、治療終了時の中耳炎分泌物、上咽頭ぬぐい液の細菌の推移は Fig. 4 のごとくである。

Organisms isolated from Middle ear and Nasopharynx

Organisms	(112 cases undergoing simultaneous collection of ear discharge and upper nasopharynx swab)						
	Ear discharge		Nasopharynx swab				
	Pre-treatment	On 3rd day	Post-treatment	Pre-treatment	On 3rd day	Post treatment	Remaining ratio
<i>S. pneumoniae</i>	43	1		47	2	1	21.1%
<i>S. pneumoniae</i> (PISP)	13			14	3	6	42.9%
<i>S. pyogenes</i>	8			12	1		
<i>S. aureus</i>	20	1		31	4	4	12.9%
C. N. S.	16	1		2			
Other G(+)cocc.	9			3	1	1	
<i>H. influenzae</i>	34			36	2	3	8.3%
<i>H. parainfluenzae</i>				13			
<i>B. catarrhalis</i>	5			33	1		
Other G(-)rods	4			11	2		
Total	152	3		202	16	15	7.4%

Fig. 4 The change of the pathogens from middle ear discharge and nasopharynx before, during and after the treatment of acute otitis media.

中耳炎分泌物中の細菌は 3 日目に *S.pneumoniae*, *S.aureus*, coaglase negative staphylococci (CNS) 各 1 株検出したが、治療後は contamination と思われる *P.aeruginosa* が 1 例で検出されたにすぎなかった。

上咽頭ぬぐい液は 202 株中 15 株が治療後も残存した。*S.pneumoniae* は 47 例中 1 例 (21%), PISP 14 例中 6 例 (42.9%), *S.aureus* 31 例中 4 例 (12.9%), *H.influenzae* 36 例中 3 例 (8.3%) で残存した。

PISP を検出した各々の症例について各主

case	age	MIC $\mu\text{g}/\text{ml}$				microorganisms of the nasopharynx after treatment	OMA recurrent or not
		ABPC	SBTPC	CEX	CCL		
1 T.N	2	0.39	0.39	50	25	normal flora (N.F.)	Yes
2 H.S	3	0.1	0.2	12.5	3.13		not
3 A.A	3	0.78	1.56	100	50	PISP	Yes
4 Y.K	3	0.2	0.39	>100	50	PISP	Yes
5 Y.I	4	0.1	0.2	50	25	N.F.	not
6 K.S	2	0.2	0.39	100	50	PISP	Yes
7 T.M	4	0.2	0.2	50	25	N.F.	?
8 Y.A	1	0.2	0.39	>100	25	PISP	Yes
9 A.T	2	0.78	1.56	>100	>100	?	?
10 S.O	1	0.2	0.39	>100	50	PISP	Yes
11 Y.A	1	0.2	0.39	25	6.25	?	Yes
12 S.N	2	0.39	0.78	100	50	?	Yes
13 T.K	4	0.2	0.78	100	25	PISP	Yes
14 Y.O	2	0.1	0.2	25	12.5	N.F.	not
15 H.Y	4	0.1	0.2	50	25	PISP	?
						7cases	Yes 9cases

Fig. 5 Relationship between cases of PISP and acute otitis media recurrence

治医に過去のカルテもコピーしてもらい中耳炎反復の有無をレストロスペクティブに調査した (Table 5). PISP を検出した患者の年齢は全例 4 歳以下であった。15例中11例で菌の再検を実施しており、そのうち 7 例は上咽頭から PISP を検出していた。そして、15例中 9 例 (60%) の症例は急性中耳炎を反復していた。

考 察

小児急性中耳炎の原因菌は *S.pneumoniae* と *H.influenzae* であることは耳鼻咽喉科医のなかで同意が得られている。今回の市中診療所 8 ケ所の成績をまとめた結果も *S.pneumoniae* と *H.influenzae* が主要な細菌であることを再確認した。

治療について、杉田ら (1979) は empiric therapyのために各疾患ごとに抗生物質の有効性期待係数 (Expected Efficacy Index : EEI) を提唱し、急性中耳炎では ABPC に代表される PC 系抗生物質の有用性を強調、ついで出口ら⁵⁾ (1986) も血中濃度ピーク値と 4 MIC90 を加味した新 EEI を提案している。そして臨床的にも Bacampicillin (BAPC) と CEX を比較し BAPC の有用性が確認されている⁶⁾。

このたびの検討で最も注目すべきは PISP の予想以上の存在である。つい近年まで *S.pneumoniae* は PC 系抗生物質にきわめて感性で全株が PCG の MIC \leq 0.025 μg/ml であり、PC を投与すれば臨床的にまず安心と考えられてきた。ところが、今回は市中診療所でさえ全分離株の 8.4%， *S.pneumoniae* の 24%， 中耳炎症例の 11% が PISP であった。

わが国における PISP は小栗⁷⁾ (1981) が喀痰から分離してその存在が注目されたようになった。PISP の頻度について出口ら⁸⁾ (1992) は 1981～1983 年 2.6%， 1984～1986 年、 4.5% すでに 1980 年代前半からもわずかながら存在した。1987 年～1991 年は 16.5%， 1992 年は

21.3% で 1987 年以降は PCG resistant *S.pneumoniae* (PRSP) も認められると報告している。

PISP の耐性機序は penicillin binding protein (PBP) の変化であって、 Table 3 に示したごとく β-ラクタマーゼ産生によるものではない。小栗⁹⁾ (1986) は PBP-1a および PBP-1b において PCG 親和性の低下を、 出口ら¹⁰⁾ (1992) は PBP-1a および PBP-2 の薬剤低親和性化が原因と報告している。これは PCs, CEPs の殺菌力の低下を意味するものである。何故 PISP が増加してきたかは不明であるが、 Ford ら¹¹⁾ (1991) は AM PC を使用した群よりも AMPC とクラブラン酸の合剤を使用して治療した病歴のある人で PISP が増加していたと報告している。

実際の症例では、佐藤ら¹²⁾ (1989) は PISP による中耳炎、 隹膜炎例を、 塩見ら¹³⁾ (1992) は 隹液と血液とから MIC 1.56 μg/ml の PRSP を検出した隹膜炎例を報告している。

耳鼻咽喉科では杉田ら³⁾ (1990) が生後 10 か月の男児で中耳炎を反復し、 中耳炎が改善しても上咽頭に付着した PISP が除菌されないでいる例を報告したのが初めである。引用するに Table 6 のごとく本例は BAPC を内服すると短期日で耳漏は停止するが、 BAPC を中止すると極めて短期間に中耳炎を再発する。これを繰り返し *S.pneumoniae* の ABPC に対する MIC は 0.1 μg/ml の PISP から 0.39 μg/ml、 ついで 1.56 μg/ml の PRSP へと MIC が悪くなつた。AMPC とクラブラン酸の合剤を使用しても、 また cephmenoxim (CMX) を 1 日 2 回、 点滴静注しても上咽頭に付着した PISP を除菌できなかつた。本例の耳漏や上咽頭ぬぐい液から分離した PISP, PRSP の血清型別は 23 型 (Danish Type) とすべて同一であった。追記するに 4 歳になった 1993 年 6 月まで時々中耳炎に罹患し、 上咽頭からは相变らず PISP (MIC 0.78 μg/ml) を

検出している。

Clinical course of a AOM case of <i>S. pneumoniae</i> (PISP) (Case : H.F. male, 1988 birth)											
Year month day	1988 Dec. 13 14 21	1989 Jan. 4 6 10 17 26	Feb. 20 1	1992 1993 Oct. Jun. 7 28							
period of acute otitis media	onset	onset	onset	onset							
Chemotherapy	benzylpenicillin (BAPC) 360mg/day 360mg/day	Cefaclor 480mg/day		cloxacillin 100mg/day 600mg							
Pathogen detected from middle ear discharge and nasopharynx	I <i>S. pneumoniae</i> (PISP)	I <i>S. pneumoniae</i> (PISP)	I <i>S. pneumoniae</i> (PISP)	I <i>S. pneumoniae</i> (PISP)	I <i>S. pneumoniae</i> (PISP)	I <i>S. pneumoniae</i> (PISP)	I <i>S. pneumoniae</i> (PISP)	I <i>S. pneumoniae</i> (PISP)	I <i>S. pneumoniae</i> (PISP)	I <i>S. pneumoniae</i> (PISP)	
MIC - μg/ml of <i>S. pneumoniae</i>	1988 Dec.14 0.2	1989 Dec.23 0.1	1989 Jun.6 0.2	1989 Feb.20 0.78	1992 Mar.1 0.39	1992 Oct.7 0.2	1993 Jun.21 0.78				
benzyl penicillin											
ampicillin	0.39	0.39	0.39	1.56	1.56	0.2	0.78				
pipacillin	1.56	0.78	1.56	3.13	3.13						
cloxacillin	1.56	0.78	1.56	1.56	1.56						
aztreonam	6.25	0.78	6.25	6.25	50						
aztreonam	≥ 200	≥ 200	≥ 200	≥ 200	≥ 100						
erythromycin											
clindamycin	3.13	≤ 0.05	50	100	50						
methicillin											
vancomycin					0.2	0.56	1.78				
clotrimazole					0.2	0.78	0.78				

Fig. 6 A primary case of PISP AOM
Since ten month after birth, the patient recurs acute otitis media. Every time penicillin G insensitive *S.pneumoniae* (PISP) was detected from middle ear discharge and nasopharynx swab. The patient is 4 years old in 1993, PISP was cultured from nasopharynx in June, '93.

今回の検討でも14例の中耳炎分泌物から PISP を検出し, SBTPC の内服で全例耳漏は停止, 臨床的にも PC は有効であった。ところが治療後にも上咽頭ぬぐい液から 6 例 (42.9 %) で PISP を検出, PSSP 2.1%, *H.influenzae* 8.3% であるので PISP の残存率がきわめて高いことがわかる。共同研究者の出口は中耳と上咽頭とから検出した *S.pneumoniae* の生物型 (Biotype) は相関が認められたと報告している¹⁴⁾。粘膜に付着した PISP は除菌が困難であることが PISP 感染の第 1 の特徴である。

第 2 の特徴は中耳炎の反復である。すなわち PISP 検出例をレトロスペクティブに検討すると 15 例中 9 例 (60%) は短期間に急性中耳炎を繰り返していた。

第 3 の特徴は PISP 検出例はすべて 1 ~ 4 歳の低年齢者である。

PISP を検出し中耳炎を反復した症例を示す。患者は生後 11か月女児である (Table 7)。

A Case of PISP (K. S. An 11-month-old female.)

Time of development of otitis media	affected side	therapies
Mar. 13-27, 1992	bilateral	300 mg AMPC/day × 9 days
Apr. 4-14, 1992	right	300 mg AMPC/day × 9 day
Apr. 25-May 1, 1992	right	250 mg SBTPC/day × 8 day
	isolate: middle ear nasopharynx >	after treatment, <i>PISP,</i> <i>H.influenzae</i> → (nasopharynx): PISP
		250 mg SBTPC/day × 5 days
May 15-22, 1992	right	300 mg AMPC/day × 4 days
May 29-June 5, 1992	right	300 mg AMPC/day × 8 days

Fig. 7 A case of recurrent otitis media. PISP and *H.influenzae* were detected from middle ear discharge and nasopharynx before treatment. otitis media cured but PISP was found from nasopharynx.

1992年3月に1回、4月に2回、5月に2回急性中耳炎に罹患し、そのたびに PC 系抗生素を投与され中耳炎は短期日で改善するが PC 投与を終了すると 1 ~ 2 週間で再発する。1992年4月25日の再発時は中耳炎分泌物と上咽頭ぬぐい液の両方から PISP と *H.influenzae* を検出した。治療は SBTPC 20mg/kg/day の内服で中耳炎は改善した。ところが第 7 病日の上咽頭ぬぐい液から PISP が検出され、治療終了後 14 日目に右急性中耳炎を再発した。

ま と め

1. 市中診療所 8 ケ所での小児急性中耳炎の原因菌を検出した。
2. 主な検出菌は *S.pneumoniae* と *H.influenzae* であった。
3. 肺炎球菌の感受性に変化が生じた。PC 低感受性肺炎球菌が中耳炎症例の 11% から、全分離株の 8.4%，肺炎球菌の 24.1% を占めた。
4. PISP 性中耳炎も ABPC 30mg/kg/day の内服で改善する。しかし、PC の内服を中止すると短期間に再発、これをくりかえす。
5. 上咽頭に付着した PISP は中耳炎治ゆ後も残存しやすい。

6. PISP は 4 歳以下の低年齢者から検出された。

文 献

1. 杉田鱗也, 市川銀一郎, 後藤重雄ほか : 急性化膿性中耳炎の起炎菌. 日耳鼻 82 : 568-573, 1979.
2. 杉田鱗也, 河村正三 : 急性化膿性中耳炎の薬剤選択. 日耳鼻 82 : 1381-1389, 1979.
3. 杉田鱗也, 深本克彦, 小栗豊子ほか : 1 才未満の難治性急性中耳炎. 日耳鼻感染症研究会誌 8 : 58-63, 1990.
4. 杉田鱗也, 耳鼻咽喉科領域の各種感染症の原因菌の時代による変遷. 日耳鼻感染症研究会誌 11 : 136-143, 1993.
5. 出口浩一, 河村正三 : 抗菌性物質有効性期待係数 (EEI) に関する再検討. 日耳鼻感染症研究会誌 7 : 141-149, 1989.
6. 河村正三, 杉田鱗也, 藤巻 豊ほか : 急性化膿性中耳炎に対する Bcampicillin (B-APC) と Cephalexin (CEX) の比較試験. 耳鼻臨床 78 : 1147-1165, 1985.
7. 小栗豊子, 小酒井望 : 臨床材料から分離された肺炎球菌の血清型別と抗生物質感受性 JJA 34 : 95-105, 1981.
8. 出口浩一, 横田のぞみ, 古口昌美ほか : 小児由来 β -ラクタム剤耐性 *S.pneumoniae* に関する検討. I : 薬剤感受性パターンの経年的推移, 感染症 66 : 1152, 1992.
9. 小栗豊子 : 肺炎球菌の臨床細菌学的研究 JJA 39 : 783-806, 1986.
10. 出口浩一, 横田のぞみ, 古口昌美ほか : 小児由来 β -ラクタム剤耐性 *S.pneumoniae* に関する検討. II. β -ラクタム剤耐性の P-BPs. 感染症 66 : 1153, 1992.
11. Ford, K. L, Mason EO, Kaplan SL et al : Factors associated with middle ear isolates of *Streptococcus pneumoniae* resistant to penicillin in a childrens hospital. J. of Pediatrics 199 : 941-944, 1991.
12. 佐藤幸一郎, 実村 信 : 小児における penicillin 低感受性 *S.pneumoniae* 感染症の経験. 感染症 6 : 189-193, 1989.
13. 塩見正司, 植月重介, 濑戸真澄ほか : ペニシリン耐性肺炎球菌髓膜炎の 1 症例と肺炎球菌髓膜炎の臨床的検討. 感染症 66 : 1153, 1992.
14. 出口浩一, 横田のぞみ, 古口昌美ほか : 上咽頭細菌叢と急性化膿性中耳炎, 及び急性副鼻腔炎における起炎菌との相関. 第 7 回 Bacterial Adherence 研究会, 東京, 1993.

質 疑 応 答

質問 野村隆彦 (愛知医大)

上咽頭の PISP 残存例に対しては経口薬剤治療では困難と思われる。注射による治療はどの程度の頻度で行われるか。

質問 新川 敦 (東海大)

PISP を PC 耐性肺炎球菌と解釈してよいのか。低感受性と考えてよいのか。

応答 杉田鱗也 (順大)

注射の経験は 1 例しかない。肺炎球菌ワクチンの使用を考えている。

応答 杉田鱗也 (順大)

PISP は Penicillin insensitive *S.pneumoniae* の略で PC 低感受性肺炎球菌と解釈している。MIC $2 \mu\text{g}/\text{ml}$ 以上の PRSP (PC 耐性株) も少数検出されている。近い将来 PRS P が急増し大問題となる。